

芥川の病理と『歯車』

—『歯車』に見る統合失調症（分裂病）の世界—

櫻 井 信 也

I はじめに

筆者は文学のディレタントにすぎないが、昨年度、博士後期課程の近代文学の演習を受講させていただいた。発表する機会も与えられ、芥川龍之介（1892-1927）の病理と作品についての病跡学的な分析をテーマに選んだのだが、それは単に芥川が病跡学において取り上げられることの多い作家という印象があったからにすぎない。しかし、発表の準備をしている過程で何人かの精神病理学者の病跡学の論文や著書（岩井，1969；荻野，1983；福島，1984 など）を読み、そこには必ず取り上げられている『歯車』に惹かれた。それまでは、『歯車』という作品があることすら知らなかった。読んで驚嘆した。統合失調症者の妄想体験をこれほど克明に描写し、その雰囲気を実感に伝える作品は日本の文学史において存在しないのではないかと考えた。そして、何故、芥川は『歯車』を創作することになったのか、あるいは、何故、これほどの稀有な作品を描き得たのか、について関心をもった。そこで、芥川の病理と『歯車』を関連させて病跡学的に分析することを発表のテーマとして取り組んでみたいと思ったのである。すでに、いくつもの優れた『歯車』についての病跡学的研究があり、屋上屋を架することになると思うが、筆者の臨床経験を通しての統合失調症理解から幾分でも独自の視点を示せればと思う。

以下、塩崎（1957）が「一人の文学的に極めて高い天賦をもった精神病患者の書いた病誌であり、報告でもある」と評した『歯車』を取り上げ、芥川の病理との関連で論じようと思う。

はじめに、作品を引用しつつ精神病理学的に解釈する。次に『歯車』執筆までの芥川の作風の変化について、その意味するところを論じる。さらに、芥川の病理、『歯車』創作と芥川自身の病理の自覚との関連、芥川の自己の倒錯を見る眼について論考した。

II 『歯車』に見る病理（妄想型統合失調症者の体験世界）——精神病理学的解釈

『歯車』は、芥川が服薬自殺した昭和二年に書かれた作品であり、「レエン・コオト」「復讐」「夜」「まだ？」「赤光」^{しやっこう}「飛行機」という六つの章から構成されている。『歯車』全章を通して描かれているのは、罪深い自分を「何ものかの僕を狙っている」という罪業妄想と被害妄想であり、自分にとってすべてが偶然でなくなり意味をもってしまう異常性である。

病跡学的に極めて価値の高い作品であるので、長い引用⁽¹⁾になるが以下にそのおおよそを紹介し、

精神病理学的に考察する。以下、直接引用は「 」で示す。

第一章 「レエン・コウト」

主人公である僕という人物は知人の結婚式に出席するために、ある避暑地から東海道のある停車場にむけて自動車をとばす。乗り合わせた客からレエン・コウトを着た幽霊の話を聞く。この客と別れて停車場の中に入っていくと、待合室のベンチにはレエン・コウトを着た男が一人ぼんやり外を眺めていた。彼は幽霊の話を思い出して苦笑し、次の列車を待つためにカフェに入る。日暮れ近くの列車に乗り、ある郊外の停車場で降り省線電車に乗り換えるが、電車を待っている間に知り合いのT君と会う。電車に乗って、T君と並んで、T君が先日まで出張していたフランスの話などをしていると、彼らの前にレエン・コウトを着た男が来て腰をおろす。彼は不気味になり、前に聞いた幽霊の話をT君に話したい心持ちになるが話題は転じてしまう。

彼は省線電車からホテルに向かうが、視野の中に妙なものを見つける。「僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？—— と云うのは絶えずまわっている半透明の歯車⁽²⁾だった。僕はかう云う経験を前にも何度か持ち合わせていた。歯車は次第に数を増やし、半ば僕の視野を塞いでしまう。が、それも長いことではない。暫くの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、—— それはいつも同じことだった」。

ホテルの玄関を入るときにはもう歯車は消えていた。結婚披露式の晩餐のすんだ後、自分の部屋にこもるために人気のない廊下を歩いていった。鏡台の前に行き、自分の顔を映すと、皮膚の下骨組みを露にし、それが蛆を思い起こさせた。彼は居たたまれなくなって部屋を出て、ロビーに歩いていき、椅子に腰を下ろす。そこにも五分と座っている訳にはいかなかった。レエン・コウトは今度もまた彼の横にあった長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあった。廊下を引き返すと、給仕だまりから、一人も姿は見えなかったが話し声が耳をかすめた。「それは何とか言われたのに答えた All right という言葉だった。僕はこの対話の意味を正確に掴もうとあせっていた。『オオル・ライト』？ 『オオル・ライト』？ 何が一体オオル・ライトなのであろう？」。

部屋に入るのは妙に不気味だったが、思い切って部屋の中に入り、鏡を見ないようにし、机の前の椅子に腰をおろし、短編を続けようとした。インクをつけたペンがやっと動いたかと思うと、同じ言葉ばかり書きつづけていた。

All right----- All right----- All right sir-----

そのとき、電話のベルが鳴り、彼は驚いて立ち上がり受話器をとると、姉の娘からの急を知らせる電話だった。「大へんなこと？」「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ」。

電話はそれぎり切れてしまった。彼は受話器を置き、反射的にベルのボタンを押した。

しかし、彼は手の震えていることを彼自身はつきり意識していた。給仕が容易にやってこないことに苛立たしさよりも苦しさを感じながら何度もベルのボタンを押した。「やっと運命の僕に教えた『オオル・ライト』という言葉を理解しながら」。

姉の夫はその日の午後、東京から余り離れていない或田舎に轢死していた。しかも、季節に縁のな

いレエン・コオトをひっかけていた。

レエン・コオトは彼の不気味な運命の予兆である。「了解」とは「レエン・コオトが彼の運命の不気味さを象徴している。この結びつきを了解したことが彼にとっては All right」なのである」（岩井、1969）。

このような場面で、病者は、自分をつけ狙っている何者かの手先が至る所に存在し（自分の知らないところで人々が示し合わせている）、その企みが順調に進行していることを話し合っていると理解し、「やはり、そうか」と体験する（了解する）ことが一般である。

第二章 「復讐」

この話は、前章に続いてホテルから始まる。彼の姉の夫は、家が焼ける前に家の価格の二倍の火災保険に加入していたために放火の嫌疑をかけられ自殺したが、「僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだった。僕は或る汽車の中から山を焼いている火を見たり、或いは又自動車の中から（その時は妻子とも一しょだった）常磐橋界隈の火事を見たりしていた。それは彼の家の焼けない前にもおのづから僕に火事のある予感を与えない訳には行かなかった」。

彼は努めて妄想をおしのけ、もう一度ペンを動かそうとしたが、一行とは書けなかった。とうとう机の前を離れ、ベッドの上に転がったまま、トルストイの *Polikouchka* ^{ポリクーシカ} を読み始めた。「彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加えさえすれば、僕の一生のカリカチュアだった。殊に、彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無気味にさせた」。

彼は部屋を出て牢獄のように憂鬱な廊下を頭を垂れたまま歩き、階段を上り下りしているうちにいつかコック部屋に入って行った。彼はそこを通りぬけながらコックたちが冷ややかに彼を見ているのを感じた（注察妄想⁽³⁾）。彼はホテルを出て姉の家に向かった。途中、愛読者と名乗る男性に先生と呼ばれたことに、彼を嘲る何ものかを感じずにいらなかった。彼は三人の子どもたちと一緒に露地の裏のバラックに避難している姉を訪ねた。轢死した姉の夫は汽車のために顔もすっかり肉塊になり、僅かに唯口髭だけが残っていたとかいうことだったが、壁にかけた義兄の肖像絵はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはぼんやりしていることに彼は恐怖を感じ、昼食を辞退して、タクシーで青山の精神病院に向かうが、車は迷ってしまい、あきらめて降りてしまう。やっと精神病院にいく横町をみつけあるいて行くが道を間違えて青山斎場に出てしまう。それは十年前夏目漱石の告別式以来、一度も門の前さえ通ったことのない建物だった。「この墓地の前へ十年目に僕をつれて来た何ものかを感じ」（傍点は筆者）ながらそこを通り、精神病院の門を出た後、また自動車に乗ってホテルに帰った。玄関に降りると、レエン・コオトを着た男が給仕と喧嘩しているようだったが、それは給仕ではなく緑色の服を着た自動車係りの男だった。彼は、ホテルに入ることに不吉な心もちを感じ、道を引き返していった。銀座通りに出て、ある本屋に入った彼は「ギリシャ神話」という一冊の本を手取る。子どものために書かれたものらしかったが、偶然読んだ一行は忽ち彼を打ちのめした。「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかないません」。

彼は、本屋を後ろに人ごみの中を歩いて行った。「いつか曲がり出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙っている復讐の神を感じながら。-----」

ここでも、彼は不吉な運命の予兆に至る所に見出すが、その背後に何者かの存在を感じている。妄想体験において、それは、とても太刀打ちできない圧倒的な力をもつものであることがしばしばである。

第三章 「夜」

彼は丸善の二階に行き、書棚にストリンドベルグ Johan August Strindberg⁽⁴⁾の「伝説」を見つけ目を通した。それは彼の経験と大差のないことを書いたものだった。今度は手当たり次第に厚い本を手にとると、それは精神病者の画集だった。挿絵の一枚には目鼻のある歯車ばかり並んでいた。やぶれかぶれになって書棚にある本をつぎつぎと開いていくと、なぜかどの本も必ず文章か挿画かの中に多少の針を隠していた。

ポスタアの展覧室で見た聖ジョージらしい騎士が一人翼のある竜を刺し殺している絵から、韓非子の中の屠竜(「龍之介を殺す」)を連想させるのである)の技を思い出し、展覧室に通り返けずに階段を下っていく。丸善を出た彼は夜の日本橋通りを歩きながら、屠竜という言葉、^{すずり}硯の銘、その硯をくれた若い実業家の破産、などというように思いを巡らせていった。すると、「僕は突然何ものかの僕に敵意をもっているのを感じ」(妄想着想⁽⁵⁾)、或カフェへ避難する。しかし、そこでナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろまた不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だった時、彼の地理のノート・ブックの最後に「セイント・ヘレナ、小さい島」と記していた。彼はナポレオンを見つめたまま、彼自身の作品を考え出す。まず、記憶に浮かんできたのは『侏儒の言葉』の中のアフォリズムだった(殊に「人生は地獄よりも地獄的である」という言葉だった)。それから『地獄変』の主人公、良秀という画師の運命だった。彼は、こういう記憶から逃れるためにカフェの中を眺めまわしたが、カフェは短時間の間にすっかり容子を改めていた。もう一度人目に見えない苦しみの中に落ち込むのを恐れ、カフェを出た。十時頃ホテルに着くと、幸いにも来合わせたのは先輩の彫刻家だった。じつと顔を見つめ、ホテルにいる理由を尋ねる彼(先輩の彫刻家)の眼に探偵に近い表情を感じ、「どうです、僕の部屋へ話に来ては？」と挑戦的に話しかけた。

ここは統合失調者の妄想世界の雰囲気を実にリアルに伝えている箇所のひとつである。『歯車』が全くの創作とは思われない所以である。妄想世界では既知の人さえも秘密を探る人間として体験されることは稀ではない。また、そうした対象にときに挑戦的になる。“あなたが私の秘密を探ろうとしていることはわかっていますよ。怯みませんよ。”という感じである。

部屋へ来ると彼はいろいろのことを話した。しかし、大抵は女の話だった。「僕は罪を犯したために地獄に堕ちた一人に違いなかった。が、それだけに悪徳の話はいよいよ僕を憂鬱にした」(罪業妄想)。

ふと、鏡の中の彼(先輩の彫刻家)の後ろ姿を見ると、彼は丁度耳の下に黄色い膏薬を貼り付けていた。話をしながらも、「僕は彼の内心では僕の秘密を知るために絶えず僕を注意しているのを感じ

た」。

第四章 「まだ？」

ホテルの部屋で短編を書き上げたことに満足し、銀座の本屋に出かけることにする。本を二冊買って或カフェに入り、鋭いアフォリズムを閃かせていた『メリメエの書簡集』を読み始める。一杯の珈琲を飲み終わった後「何でも来い」という気になり（病者はときに破れかぶれの捨て身の心境になる）、カフェを出る。飾り窓を覗きながら歩いていると高等学校以来の旧友に会う。彼は、旧友に誘われてふたたびカフェに入り話をする。

「君はちっとも書かないようだね。『点鬼簿』というのは読んだけれども。----- あれは君の自叙伝かい？」

「うん、僕の自叙伝だ」

「あれはちょっと病的だったぜ。この頃は体は善いのかい？」

「あいかわらず葉ばかり嚙んでいる始末だ」

「僕もこの頃は不眠症だがね」

「僕も？ どうして君は『僕も』と言ふのだ？」（統合失調症者は秘密がつつぬけになっている⁽⁶⁾、と体験する）。

「だって君も不眠症だって言うじゃないか？ 不眠症は危険だぜ。-----」

彼は友人と別れ、ふたたびホテルに帰り、新しい小説にとりかかった。ペンは不思議なくらい、原稿用紙の上を走ったが、「二、三時間の後には、誰か僕の目に見えないものに抑えられたようにとまってしまった」（作為体験⁽⁷⁾）。

四五分の後、かかってきた電話は何度返事をして、何か曖昧な言葉を繰り返して伝えるばかりだった。それはともかくもモオルと聞こえたのに違いなかった。電話を離れてもモオルという言葉だけは妙に気になった。「モオル Mole-----」モオルは鼯鼠^{もぐらもち}と云う英語だった。この連想は愉快ではなかった。がMoleをla mort^{つづ}に綴りなおした。ラ・モオルは、死という仏蘭西語は忽ち彼を不安にした。けれども、彼は不安の中にも何か可笑しさを感じていた。のみならずいつか微笑していた。「この可笑しさは何のために起るか？ それは僕自身にもわからなかった」（感情倒錯⁽⁸⁾）。

第五章 「赤光」

彼はひとりの老人を尋ねることにした。老人は或聖書会社の屋根裏にたったひとり小使いをしながら、祈祷や読書に精通していた。彼らはいろいろのことを話し合い、「僕はこの一二年の間、僕自身の経験したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に伝わり、僕もまた母のように精神病院にはいることを恐れない訳にもいかなかった」。

老人から『罪と罰』を借りてホテルに帰ることにした。しかし、暫くの後、胃の痛みを感じ出した。この痛みを止めるのは一杯のウイスキーだった。この痛みをとるために或レストランに入った。ウイスキーを飲んでみると、隣にいた新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小声に話していた。彼は彼らに背中を向けたまま、全身に彼らの視線を感じた。「彼らは確かに僕の名を知り、僕の噂をしてい

るらしかった」。

見も知らない人間が自分の噂話をするという関係妄想は統合失調症者がよく体験することである。

彼はこのレストランから逃れ、もう一度戦闘的精神を呼び起し、ウイスキーの酔いを感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。本を読みはじめたが恐怖から逃れることができなかった。届いている手紙を受け取って封を切ると、どれもに苛立った。三番目に封を切った甥からの手紙を読むと「歌集『赤光』の再版を送りますから-----」と書いてあり、何ものかの冷笑を感じ、部屋の外へ避難することにした。彼は、片手に壁を抑え、やっとロビーに歩いて行った。広いロビーを眺めまわすと、「外国人が四、五人テエブルを囲んで話をしていた。しかも彼らの中の一人、—— 赤いワンピースを着た女は小声に彼らと話しながら、時々僕を見ているらしかった」。

「Mrs. Townshed-----」

何か彼の目に見えないものはこう彼に囁いて行った。ミセス・タウンズヘッドなどという名は勿論彼の知らないものだった。彼はまた椅子から立ち上がり、発狂することを恐れながら、彼の部屋に帰ることにした。

第六章 「飛行機」

彼は家に帰るために東海道線の或停留所から或避暑地へ車を飛ばす。やっと彼の家に帰った後、妻子と催眠薬の力で二、三日は平和に暮らした。

彼は妻の実家に行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網には白いレグホオン種の鶏が静かに歩いていた。それから彼の足元には黒犬も一匹横になっていた。「僕は誰にもわからない疑問を解こうとあせりながら、とにかく外見だけは冷ややかに妻の母や弟と世間話をした」。

そこへ彼らを驚かしたのは烈しい飛行機の響きだった。それは翼を黄色に塗った、珍しい単葉の飛行機だった。

妻の母の家を後ろにした後、松林の中を歩きながらじりじり憂鬱になって行った。「なぜあの飛行機はほかに行かずに僕の頭の上を通ったのであろう？ なぜ又あのホテルは巻煙草のエエア・シップばかり売っていたのだろう？僕はいろいろの疑問に苦しみ、人気のない道を選んで歩いて行った」。

さらに、病理が進行すると、病者は、その答えがわかり、妄想の story が体系だっていくのである。

西村（1989）は、「僕のもついろいろの疑問が『誰にもわからない疑問』であることは『僕』自身十分承知している。それは例えば何故僕が僕に生まれてきたのかという様な根源的な問いだからである。にもかかわらず『僕』は問わずにいられない。そして『僕』はそこに絶えず『僕』をつけ狙っている『何ものか』の存在を見る。——（何ものかは）即ち偶然を支配するものである。『何ものか』は『運命』『復讐の神』『誰か僕の見えないもの』などとその名を変えて『僕』を追い詰めてゆく」と理解するが、それは間違いであろう。『歯車』が妄想をもつ人間の苦悩が描かれているという視点から考えると、「僕」の問いは Why ～？ ではなく How to ～？ である。何ものの計らいで、どのようにして「あの飛行機はほかに行かずに僕の頭の上を通ったのか」を知りたいのである。「誰にもわからない疑問」なのは、それが根源的な問いだからではなく、誰もが信じがたい個人的な体験をして

いる、という認識があるからである。

彼は自宅の二階に仰向けになり、じっと目をつぶったまま、烈しい頭痛をこらえていた。そこへ誰か梯子段を慌ただしく昇って来たかと思うと、すぐばたばた駆け下りていった。彼は妻だったことを知り、驚いて体を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。すると妻は突っ伏したまま、息切れをこらえていると見え、絶えず肩を震わしていた。

「どうした」

「いえ、どうもしないのです。-----」

妻はやっと顔を擡げ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訳ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまいそうな気がしたものですから。-----」

「それは僕の一生の中で最も恐ろしい経験だった。—— 僕はもうこの先を書きつづける力をもっていない。こういう気持ちの中に生きているのは何とも言われない苦痛である。誰か僕の眠っているうちにそっと絞め殺してくれるものはないか？」

ここの妻とのエピソードは真実であることは芥川の妻の文が語っている（芥川 文，1981）。芥川は、到底太刀打ちできない妄想の対象による避け得ない死の恐怖の遣り切れなさを表現したのである。

Ⅲ 『歯車』と芥川の病理

1. 作風の変化の意味 —— 『歯車』はどのようにして生まれたのか

芥川は、32歳のときの随筆『澄江堂雑記』^{ちやうこうどう}の中で「告白」と題して、もっと己の生活を書け、もっと大胆に告白しろ、と言われることについて、「僕も告白せぬ訣ではない。僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である。けれども諸君は承知しない。諸君の僕に勧めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上に乗った事件を臆面もなしに書けと云うのである。おまけに巻末の一覧表に主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名仮名をずらりと並べろというのである。それだけは御免蒙らざるを得ない」と述べている。

ところが、大正12年の『保吉の手帳』^{やすきち}（「初めて僕も自画像を描いた」小穴 隆一宛書簡）以降、作品は著しく私小説である（福島，1975）。それまでの歴史物——『羅生門（大正4年）』『鼻（大正5年）』『地獄編（大正7年）』は古典に題材をとり、知的で技巧的であり、物語性の高い見事な文学的表現形式を備えている——から自分自身の身の辺のことばかりを書くようになったのである。

ただ、『点鬼簿』以前の芥川は自分のことを語りながらも「秘密」を持つことがまだできたのである。大正14年の『大導師信輔の半生』では、「信輔は全然母の乳を吸ったことのない人間だった。元来体の弱かった母は一粒種の彼を産んだ後さえ、一滴の乳も与えなかった」と書かれ、母の発狂は隠されていたのである。それが、翌年、大正15年の『点鬼簿』の冒頭で「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない」と明かされるのである。

その後、自殺した年の昭和二年に書かれた『河童』(昭和2年2月)は当時の彼の人間社会に対する不快、嫌悪、鬱憤を吐き出したものであるが、寓意小説という間接的な手段を使っていた。それが『歯車』(昭和2年4月)になると彼の病的体験があからさまに克明に表現されるようになるのである。何故、このような変化(秘密が持てなくなる)が生じたのか。

黒澤(1989)は、『保吉の手帳』以降の後期の作品は、芥川の内面を映すものとなっていくのだが、それだけ激しく、彼を突き上げる内的危機があったのであり、それは、死の目前に『或旧友へ送る手記』の中で語られた「ぼんやりとした不安」に他ならないと指摘し、後期の作品は、この「ぼんやりとした不安」を克服しようとして執筆したものであると述べている。その試みは、『歯車』では中途半端に終わり(自己の人間性の描写に偏ってしまっている)、より完全な形で生の証を残そうとして執筆されたのが、『或阿呆の一生』なのだという。

「激しく、彼を突き上げる内的危機」について、精神病理学者はそこに病理を見る。加賀(1968)は、神経衰弱に苦しみ疲れ果てた彼が、「その創作力をも次第に失いゆきつつあった証拠であるが、同時に、今迄のように現実世界から超然として歴史物の世界に住んでいた彼を、現実世界に押し戻すような内面の変化があったからである」と捉えている。端的に言えば、病いの進行を理由と考えるのである。統合失調者は、「周知のごとく分裂病者の防衛機制は種類も少なく構造も単純であり、嘘言や隠し立て——秘密を持つこと——が本性上不可能に近く」(中井, 1985)なのである。彼らの妄想に共通する特徴は、自分の動静や思考が知らない相手によって探られてしまっていると体験することである。

『歯車』執筆当時、芥川は単なる神経症にとどまらず、精神病(統合失調症)の範疇に入る体験をもっていたとの指摘は多い(岩井, 1969; 荻野, 1983; 福島, 1984; 山中, 1999など)。『歯車』が芥川自身の病的な体験を素材にして書かれた作品であることは、生地そのままでないにしても確かなことと思われる。『歯車』全編の雰囲気は全くの創造とはとても思えないのである。そこに描かれているのは妄想型統合失調症者の体験世界である。

2. 芥川の病理

芥川は、統合失調症の発病期臨界期にあったと思われる⁽⁹⁾。狂気と正気との葛藤があり、だからこそ正気を頼りにして作品『歯車』を創作しえたのである。『歯車』には神経症的苦悩(頭痛、不眠など)や夢が報告されているが、統合失調症の急性期は、身体は鳴りをひそめ、身体からの感覚はほとんど覚知されず、不眠も苦痛ではなく、夢もみない。芥川は、自らが体験した狂気の発端を素材にして、その先にある真正の狂気の世界(もはや正気と狂気の葛藤のない世界)を構成しようとしたのではないかと思う。

3. 芥川の自覚

一般に統合失調症者は病識(狂気の自覚)をもたないと言われる。芥川は精神病性の体験をどのように受けとめたのであろうか。精神病理学者のカール・ヤスパース Karl Jaspers (1949)は分裂病者の病識について、「分裂病的過程の特徴は病者が完全な病識を獲得し得ないことである。もし完全な

病識が存する場合は、それが精神分裂病であるか否かを、まず疑わねばならない。—— 何故に彼等が症状に現実的意味を附与することに固執するのであるかという問いに対しては、我々はこれを理解できない現象であり、『疾病に起因するものである』と答えるより外はない。極めて優秀なる頭脳を有する人々でさえも、この誤謬を訂正できないのは驚くほどである」と述べている。

芥川に完全な病識があったとは考えにくい。いかにすぐれた知性の人でも妄想をもちうる。主人公である僕は、或聖書会社の屋根裏にたった一人小遣いをしている或老人を尋ね、神への信仰について議論しているとき、「僕はこの一、二年の間、僕自身の経験したことを彼に話したい誘惑」を感じるが、「彼から妻子に伝わり、僕もまた母のように精神病院にはいることを恐れない訳にも行かなかった」とある。ここから病識があると考えるのは間違いである。病識がなくとも、打ち明ければきちがいとされるという認識は成立するからである。こうした認識を示す患者の手記「幽閉」がある。「これまで、ごくごく平凡な生活を送ってきた私にとって、自分の知識や経験では理解し得ない、不可解な事実ばかりが突き付けられた。私は、それらについて、他言することを避けた。それらの事実が、不自然なことであることは、理解できる。現実のことではあるが、誰に対しても、それらをうまく説明できるとは思えない。むしろ、そんなことを迂闊に他者に言って、失笑に付されたり、馬鹿にされることを、私は恐れた」。

完全な病識を、統合失調症の急性期において病者は持ち得ない。しかし、病識の不安定な時期はある。芥川が、発病期臨界期にあったと考えると正気(狂気の自覚)と狂気を行きつ戻りつしていたと思われる。芥川は妄想を迷信(superstition)という言葉で自覚しようとしていたようである。現在、日本文学館に芥川の旧蔵書が収められている。その中のストリンダベルグの『地獄』(The inferno)を見た三好行雄が、館の「図書資料委員会ニュース」十二号(昭和四五年七月)に、この本の芥川を書きこみを紹介している。表紙裏のとびらに、「この本をよんでから妙に Superstitious になって弱ったこんな妙なその癖にいやに真剣な感銘をうけた本は外にない」と書いてあったのである(山敷, 1999)。また、『或阿呆の一生』には、「彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘おうとした」(五十「^{とりこ}俘」)とある。芥川は正気に踏みとどまろうとしていたのである。

4. 芥川の自己を見る眼

山中(1999)は、芥川がまさに〈神経〉だけになって震え怯えながらもそれを克明に描写していく彼について、「彼の自己を見るまなこが、まさに前期の絢爛たる作品『地獄変』の主人公—— 絵師良秀が、燃えさかる^{びろうげ}檳榔毛の焰の中で、わが子の^{ざるぐつわ}猿轡を^{いましめ}噛みながら、縛めの鎖も切れるばかり身悶える断末魔の有様を見ながら、声ひとつたてず絵筆を握って、「地獄の屏風」を描きあげ、翌夜^{くび}縊れ死んだ—— のまなこ、あるいは『玄鶴山房』看護婦甲野のまなこに似てはいらないかと思うのである。自己の怯え、おののき、苦しむさまを、そのまま文章にする—— これこそ彼の晩年の創作態度であり、彼の現存在のあり方であった」と述べている。

三好(1976)は、『歯車』の作品的価値について、「自己の存在条件である個体の崩壊にたちあい—— ということは、つまり、意識自体の崩壊にたちあいながら、その崩壊の過程をつぶさに見張り、

まると認識しようとする絶望的な状況を強いられ、それに耐えている。おそらく二度とくりかえすことの不可能な、＜狂気＞の発端を見ようとする意識の緊張こそが、『歯車』の咲かせた花の根源なのである」と評価している。

筆者は、芥川が、明らかな統合失調症的不安と苦悩という未曾有の事態にあつて（到底歯が立たない何者かによって迫られる死への恐怖の中で）、不眠に苦しみ多量の睡眠薬をのみながら、『歯車』を描き得たことに驚嘆する。芥川は稀有な作家である。

注(1) 『歯車』岩波文庫による。表記もそのままである。

- (2) 閃輝性暗点。視野の一部に閃光を感じ、それがきらきらした光の波となって、視野周辺に広がっていき、その内部が見えなくなる現象をいう（医学大辞典、南山堂）。芥川は精神病の兆候と考えていた。主治医の斎藤茂吉宛の私信で、「この頃又半透明なる歯車あまた右の目の視野に廻転することあり、或は尊台の病院の中に半生を了ることに相成るべき乎」と書き送っている。
- (3) 周囲から監視されているという体験。
- (4) ストリンドベルグ Johan August Strindberg。スウェーデンの劇作家・小説家（1849-1912）。1886年頃から妻シリ・ウランゲルに対する嫉妬妄想や被害妄想、そして身体的異和感が顕著になっているが、この嫉妬妄想が発展した時期のストリンドベルグの創作意欲は盛んであった。『痴人の告白』では、妻シリとの姦通や同性愛、夫を思うままに支配し、毒を飲ませ、狂人であると吹聴して病院へ監禁しようとする妻の企み、妻の不義の子など、病的嫉妬の主題がリアルに描かれている。『地獄』はストリンドベルグ48歳の作品。1895年、彼は幻覚・妄想状態となったが、このころから、日記を書くようになった。この日記が、1897年、分裂病急性期からの回復期の途上で『地獄』と題して一冊の本にまとめられた。典型的な分裂病体験の記載が数多く見られる。『伝説』は『地獄』の姉妹編である。
- (5) 突然に何の媒介もなく間違った意味が思いつかれ、それを確信する。
- (6) 土居（1976）は、分裂病を秘密の有無から考えたとき、分裂病者は「内（秘密にすべきもの）は外につつまぬけになっていて、何か秘密が外にあると感ずる」と体験するという。
- (7) 自我の障害。精神活動の主体性が失われ、外から左右される、他人から支配されると感じる体験。
- (8) 置かれている状況と感情が調和せず、悲しむべき時に笑い出したり、表情、態度、話し方などに見られる感情表現が体験内容と関連を失うことを言う。
- (9) 中井久夫の発病過程論（『精神科治療への手引』より）『中井久夫著作集第1巻「分裂病」』岩崎学術出版、1984）

中井は統合失調症（分裂病）の発病過程を詳細に記述している。要約する。

(1) 発病期臨界期

「眠れなくなり、毎晩同じ悪夢を見たり、頭痛がしたりする。ついで、追いつめられた感じが、実際に何者かに追われている感じに変わる。不安は、あたりにただならぬ気配がただようという感じに変わる（妄想気分）。次第に何事も偶然と考えずごせなくなる。たまたま通りかかったところに、店員が水をまくと自分に特別の悪意をもってしたように感じる。『おたずね者』の気持ちに近くなる。自分の心の秘密が、人にみすかされているような感じも起こり、人に会ったり、外へ出るのがこわくなる」。

(2) 発病（急性分裂病状態）

急性幻覚妄想状態である。「すべてが自分にとって偶然でなくなり、しかも、そんなはずはないと考え直す心のゆとりがまったくなくなった時点である。その意味は、たいていは自分をあてこする意味であるが、ときにはおだてる意味合いのこともある。その意味が浮かんできたとき、考え直す自由、考え流すゆとりがない。机の上にマッチの空箱があれば、それは自分がちっぽけで、からっぽだということを、自分に思い知らすために誰かが置いたのだ」となってしまう。

引用文献

- 芥川 文 『追想 芥川龍之介』, 中公文庫, 1981.
- 福島 章 「芥川龍之介」『続天才の精神分析』, 新曜社, 70-80, 1984。
- 石川 勲 『幽閉』, ぜんかれん授産施設Z I P, 1993。
- 石割 透 「芥川龍之介, 10 の〈グロテスク〉」『国文学 2 月臨時増刊号』53(3), 學燈社, 88-102, 2008。
- 岩井 寛 『芥川龍之介——芸術と病理——』金剛出版, 1969。
- Jaspers, K Strindberg und van Gogh, Verlag R. Piper Co., Munchen, 1949。(村上仁訳『ストリンドベルクとフィン・ゴッホ』みすず書房, 1959)。
- 加賀乙彦 「漱石・竜之介の精神異常」(芥川竜之介研究図書(特集))『国文学』33(3), 至文堂, 53-56, 1968。
- 黒澤真奈子 「『或阿呆の一生』論」『芥川龍之介作品論集成第6巻 河童・歯車』, 翰林書房, 250-262, 1999。
- 三好行雄 『芥川龍之介論』, 筑摩書房, 1976。
- 中井久夫 「精神分裂病者への精神療法的接近」『中井久夫著作集第2巻「治療」』, 岩崎学術出版, 3-23, 1985。
- 西村小百合 「芥川龍之介『歯車』の世界——「僕」の不安を中心に」『関西学院大学日本文学界日本文藝研究』41(1), 29-40, 1989。
- 塩崎淑男 『漱石・龍之介の精神異常』白揚社, 1957。
- 萩野恒一 「芥川竜之介のパトグラフィ」『国文学解釈と観賞』48(7), 至文堂, 172-180, 1983。
- 山中康裕 『心理臨床と表現療法』, 金剛出版, 1999。
- 山敷和男 「『歯車』と『地獄』との比較文学的研究」『芥川龍之介作品論集成第6巻 河童・歯車』, 翰林書房, 199-217, 1999。